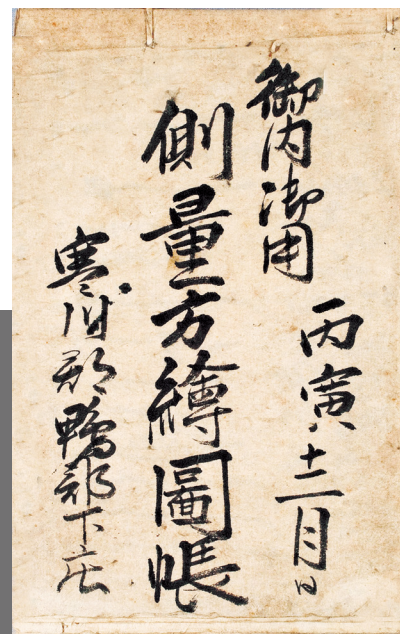


2014 秋



久米栄九衛門
通賢通



公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館



第1展示室

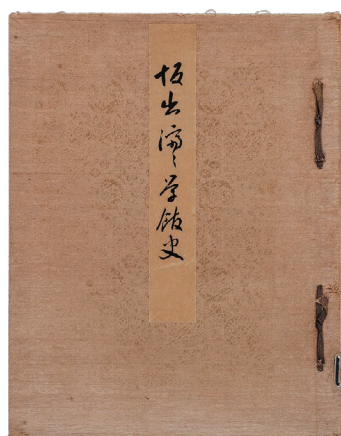
鎌田共済会郷土博物館前庭の石造物のうち、第1展示室関係資料の済々会^{せいせいかい}を記念して建てられた済済会記念碑をご紹介します。

石碑は牟礼村(現高松市牟礼町)の石工の手になる庵治石^{あじいし}(細粒黒雲母花崗岩)製で、略測値で高3.89m、基部幅2.08m、厚0.48mあり、県下の庵治石製石碑としては最大級のものです。徳川家達の題額^{てんじょう}は篆書を浮彫、黒木安雄撰并書の碑文^{かいしよ}は楷書が丸彫されています。碑文には坂出で明治19年(1886)に設立された私立中学校済々学館の成り立ちと閉館に至る経緯、そして済々会の由来、建碑の意図などが刻まれています。済々学館は初代館長を務めた鎌田勝太郎が中心となって設立したことから、ゆかりの地である鎌田共済会図書館(現博物館)の前庭に碑が建てられました。

済々学館についての歴史をまとめた「坂出済々学館史」には碑に関する記録が残されています。この記念碑を建立した済々会は明治26年(1893)4月の済々学館の閉館に際し、生徒、教員、支援者等で組織されました。会の活動は閉館当初あったものの継続せず、大正時代に入って会を再興する機運が高まり大正7年(1918)に第1回総会が持たれます。ついで大正8年に開かれた会では何か記念になるものを残そうとの発議がありましたが、具体的に記念碑の建立が決まったのは大正9年11月に開かれた第3回総会でした。1年後には事業資金も集まり、11年春には碑材に庵治石が選ばれます。大正時代、庵治石丁場では大材を産出していたことも庵治石の採用に繋がりました。碑文等の準備が整い、碑石の加工を始めてみると内部にキズがあり使えず、再度石探しをするなどの苦労もあったようですが、大正12年4月29日には建碑除幕式が行われました。式後に開かれた第4回総会では年一回の済々会の開催が決められましたが、その後の会活動についての記録は現在見つからず今後の課題となっています。

※済済会記念碑碑文全文は『淡翁鎌田勝太郎傳』P.299に載せられています。

(廣瀬 永津子)



▲坂出済々学館史



▲済済会記念碑

第2展示室

久米通賢関係資料の重要文化財指定を受け「久米通賢資料重文指定記念展」を開いたのを機に第2展示室も展示替えを行いました。ご紹介する写真と図は指定資料ではありませんが、久米通賢の旧宅について知ることのできる貴重な資料です。

写真は旧宅を南側から撮ったものですが、撮影日時は記録されていません。そこで調査部の



▲久米通賢旧宅写真

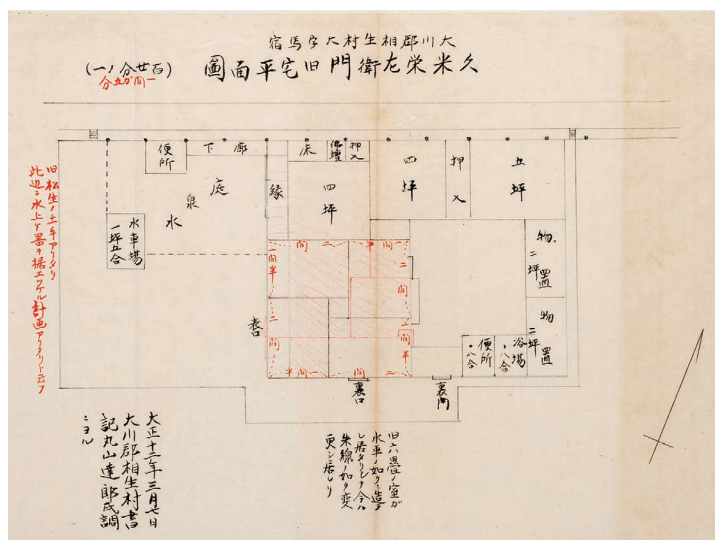
日常活動を記録した「鎌田共済会調査部年報」をみると、岡田唯吉調査部主事が大正12年(1923)3月6日から8日にかけて久米旧宅、墓所並びに遺物調査のため引田町相生村に出張しています。写真はこの時に撮影されたことが推測できます。

2種の図のうち、旧宅平面図は図中に大正12年3月7日相生村役場の書記丸山氏の調査によると記されています。もう一つの旧宅付近図は書き込みによって大正12年7月19日役場所蔵の図面を模写したことがわかりますが、岡田は7月18日から20日にかけて引田町城山調査の合間に補足調査をしており、その時に自ら写したものであると思われます。

久米通賢の旧宅は大川郡(明治32年までは大内郡)相生村大字馬宿(現東かがわ市馬宿)に所在し敷地面積は133坪、建坪は35坪ありました。調査時には子孫からも聞き取り調査を行い、通賢の時代に北側の海浜から現在地に家を移したこと、庭園の泉水には考案した器具^{じねんすい}自然水を備え宅地内にある水車場から水を流していたこと、家の前には参考品として、高い所に水を効率よく上げる装置の水揚げ器を据え付けていたことなど昔の様子を聞き取っています。

この時の調査記録は「久米栄左衛門旧宅二関スル調査」としてまとめられ、岡田文庫の一冊として当館に収蔵されています。

(廣瀬 永津子)



▲久米通賢旧宅平面図

◀久米通賢旧宅付近図

第3展示室

尾崎秀南が描いた郷土の風景 ～戦時中の坂出の名所を中心として～

日本画家の尾崎秀南^{おざき しゅうなん}（1878－1964）が、昭和17年から19年にかけて描いた坂出の名所画を中心に、中学生時代のさまざまなスケッチ画も併せてご紹介します。

明治11年（1878）、坂本村（現丸亀市飯山町）で生れた尾崎秀南（本名 仲七）は、香川県立高松中学校を卒業した後、明治32年（1899）に上京、岡倉天心、橋本雅邦、横山大観、菱田春草らが創立した日本美術院の研究会員となって、日本画の研鑽を積みました。やがて、本郷区にアトリエを構えて本格的に活動を始め、さまざまな展覧会に出品して入賞を重ねるなど、才能を発揮し、東京画壇で活躍していました。

しかし、大正12年（1923）9月、関東大震災によりアトリエが灰燼^{かいじん}に帰し、やむなく帰郷、丸亀に居を構え、郷土の画人と交わりながらも、自ら進んで弟子をとることはせず、ただ黙々と絵筆^{えび}を揮っていたといえます。

戦時下に描かれた風景画は、どれも静かで平穏な雰囲気には満ちています。しかし、この時期は戦況がますます苛烈になり、日本は破滅に向かっていった時であり、また、兄のように慕い尊敬し、支援も受けていた鎌田勝太郎がこの世を去った直後でもありました。

この時60歳を過ぎていた画家の心中はどのようなものであったのでしょうか。やはり国の変転をひしひしとその身に感じ、それとともに寂寥感や追慕の念を抱きながら、あえて静寂の中に身を置いて、郷土の風景に対していたのかもしれませんが。（吉久 由紀子）



◀ 両景橋（本紙：縦40.5×横74.0cm）

文政12年（1829）、久米通賢が築造した坂出塩田の東・西大浜をつなぐ^{たつのぼり}登運河に架かっていた橋。もとは木造橋であったが、明治25年（1892）7月、坂出塩産合資会社により、石橋が架設された。8月1日には落成式が行われ花火、餅投げ、宝投げ等で大いに賑わったという。通賢の子孫である久米与平が設計施工したアーチ形の美しい曲線を描いたこの橋は、太鼓橋とも呼ばれて親しまれていたが、昭和21年（1946）運河拡張のため撤去された。



◀ 弥蘇場の湧泉（本紙：縦42.0×横74.0cm）

別名野沢井ともいう。湧き出る水は清く澄み、味は芳醇で、どんな大旱にも涸れたことがないとされる。景行天皇の時代の讃留^{はいる}靈王悪魚退治の伝説と、保元の乱（1156）後、配流され、讃岐の地で没した崇徳上皇の遺体を浸し、勅使の来るのを待ったとされる場所としても知られている。



▶ 中学生時代に「無手本想像画」として描かれた瀑布の画は「甲」の評価を受け、さらに「木炭画の材料によし 保存し置候こと」と教師の添え書きがある。

「淡翁莊」・「本店」の登録有形文化財認定

今春の博物館「久米通賢関係資料」の国重文指定に続いて、7月には上記2件の建造物がこれまた国の「登録有形文化財」に答申されました(認定書及び銘板の交付はこの秋)。

しかも、今回は付属の「大門」・「黒門」も含めた4棟一括です。これはかねてから当財団の歴史的資源の価値を高く評価して下さっている丸亀の建築家・多田善昭さん(善通寺偕行社の保存と登録で有名)が「裏(南)の博物館と表(北)の淡翁莊・本店を回遊できるようにすれば『文化ゾーン』としてカマダの存在価値が街作りの上で非常に重要になる」という持論に基づいて、敢えて周辺の門までを含めて登録申請して下さいました。

折から「本店」では8月4日から8日まで「醤油画」の小沢剛東京芸大准教授の「醤油芸術研究所」が活動を開始され、タイミング的には絶好の展開となりました。

しかし、これからが大変。今まではただ「持っていた」資源を「公益」のために存分に役立てなければならぬのです。

皆様の強いご支持とご協力をお願い申し上げます。

(常務理事 鎌田 郁雄)



▲淡翁莊 主屋



▲旧鎌田醤油 本店



▲淡翁莊 黒門



▲旧鎌田醤油 大門



久米通賢「牛旋激水圖」雑感

大島 立子

前号掲載の久米通賢による「牛旋激水」(図Ⅰ)の二枚の引き札に私が惹きつけられたのは、中国の技術書『天工開物』(宋応星著1637年刊)、農書『農政全書』(除光啓著1639年刊)にある揚水機の挿絵(図Ⅱ)に似ていたからである。しかし大きな違いがあった。水揚げにピストンを使用しているところである(図Ⅰ)。ピストンの構造は久米が『理工学書』に示した「足力水」と同じであろう(図Ⅲ)。なお中国固有の揚水機にピストンを利用したものはないと言われている*1。

それでも中国からの影響を何とか探そうとするのは、中国史を専攻している者の性であろう。そして『農政全書』に引用されている『泰西水法』の中にピストン使用のヨーロッパの揚水工具「恒升車」(図Ⅳ)に行き着いた。著者の除光啓は明代末のクリスチャン官僚であり、ジェズイット宣教師から多くのヨーロッパの技術を学び、漢訳している。その一つが『泰西水法』(Sabatino de Ursis 著)であった。これが久米の「牛旋激水」に影響を与えた可能性はあるのか。

江戸時代、長崎から多くの漢籍が輸入されていた*2。主には法制・儒学に関わる書籍だったが、『天工開物』『農政全書』のような実用書も多い。すでに17世紀末、貝原益軒は『天工開物』に言及し、日本最古の木版の農書『農業全書』(1691年刊)は『農政全書』から知識を得ているという。17世紀以来、長崎到来の書籍の記録に『農政全書』が少なからず見られる。その後1720年には全面的に禁書であったヨーロッパ人著作の漢訳書も技術書などは禁が解かれた。『泰西水法』もその中に含まれ、明和8年(1771年)に輸入された記録があり、また同じく漢訳された技術書『遠西奇器図説』(P.Joannes Terrenz 著)が延享2年(1745年)に輸入された。本書では「恒升車」についての説明は簡単だが、『泰西水法』にも紹介されている「龍尾車」と「玉衡車」は図解してある。同じ頃輸入された『古今図書集成』には『泰西水法』の揚水機の箇所がそのまま引用されている。

薩摩藩が刊行した農書『成形図説』(文化元年1804年刊行)に「龍尾車」と「玉衡車」が紹介されている。「蕃名」(ヨーロッパ語)が付されている工具がある中で、この名称で記されていることは漢籍からの引用であろう。すでに技術や知識をヨーロッパ人から直接得ていた時代だが、まだ漢訳書の役割も大きかったことを示している。久米の大坂遊学(1798年—1802年)はこのような時期であった。「恒升車」が「牛旋激水」考案に影響した可能性もある。

大蔵永常『農具便利論』(1822)に載せる「激瀧水」は「牛旋激水」と同じように牛と歯車とピストンを組み合わせた揚水機であり、原理が同じだけでなく完成図も久米の引き札にきわめて似ている。大阪の豪商中村某が「諸国の農夫に知らしむべく記してくれ」と大蔵に託したと言う。これは久米の興行目的と同じである。この中村某は久米の「牛旋激水」考案・製作を援助し、1816年の興行に関与していたのではないだろうか。

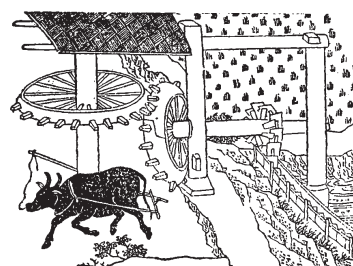
(愛知大学教授)

*1 前田清志「水を操る—揚水と動力の技術史」(江戸のメカニズムたばこと塩の博物館、研究紀要」3号、1989年)、ジョセフ・ニーダム(東畑精一、藪内清監修)『中国の科学と文明』全11巻(思索社、1974-81年)

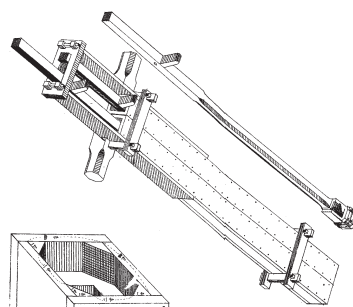
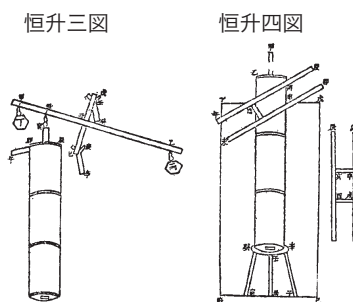
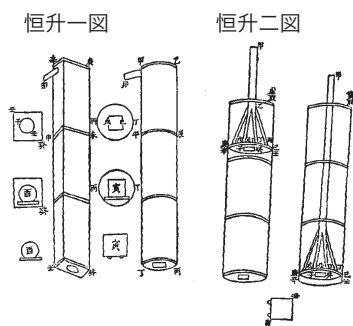
*2 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所、1967年)、同『江戸時代における中国文化受容の研究』(同朋舎、1986年)



▲Ⅰ 「牛旋激水図」(部分)



▲Ⅱ 牛転翻車(『農政全書』巻17)

▲Ⅲ 「足力水」分解図
(『理工学書』)▲Ⅳ 「恒升車」分解図
(『泰西水法』但し『農政全書』巻19)

郷土博物館のあゆみ

(3) 調査部とは何か

調査部の誕生

郷土博物館は大正13年(1924)10月に竣工するが、翌年5月の開館まで時間を要した。そこで博物館の開創と活動について述べる前に、鎌田共済会の中で博物館より以前に設置され、しかも博物館と密接な関係を持つことになる調査部について述べておきたい。

鎌田共済会の歴史の上では、大正11年10月20日に調査部が設置され、岡田唯吉おかだ たけきちが調査部主事に就任して、確固とした新組織がこの時に出来たとされている。しかし実情は少し異なるようである。岡田は10月18日に共済会に赴任し、20日に調査部の責任者の地位に就いたことは確かであるが、これ以前に鎌田共済会内に「調査部」設置に関する動きは全く見られず、「調査部」という名称もこれ以前には知られない。すなわち岡田の共済会入りと同時に急遽調査部の設置がなされたとみられるのである。岡田がこの時期に共済会に招かれた最大の理由は1ヶ月後に迫った摂政宮裕仁皇太子を鎌田共済会に迎える際の説明役としてであった(本紙第2号9頁参照)。おそらく皇太子に面謁する際の岡田の何らかの肩書きが必要であり、そのために「調査部主事」が考え付かれたと思われる。

この当時、鎌田共済会の施設としては図書館があるだけであった。図書館職員は中尾館長代理以下5人おり、中尾は共済会理事でもあるので、図書館の責任者としては主事の阿部由良がいた。「主事」は、これ以後に共済会に設けられる諸施設の責任者の称となる。それに対して調査部は施設ではなく一部署であり、職員は岡田ただ1人、その場所も図書館2階の2室(調査室・参考室)を占めるだけであった。そのため岡田は図書館職員とも未分化の状態で、出欠その他の毎日の動向は「図書館日誌」に記入され、時には図書館の仕事もすることがあり、4ヶ月後の大正12年1月には、阿部主事の体調不良と長期欠勤のためもあり、岡田は図書館兼帯を命じられている。岡田について当初は「主任」や「調査係」とも称されており、肩書きが固まっていないことも「調査部」の位置づけが共済会の中で確固としたものではないことを示している。皇太子行啓等での岡田の際立つ働きとともに「主事」の称が定着し、その後の岡田の精力的な調査研究活動とともに「調査部」も組織としての存在が確立していったようである。

やがて郷土博物館が開館すると岡田は博物館主事も兼務することになる。主事の兼務は他の施設ではないことであるが、調査部の調査研究と博物館の展示は一体不離のものであったことからの措置であろう。

大正15年頃から岡田の動向は「図書館日誌」に書かれなくなり、図書館と調査部はしだいに分化していった。いわば岡田自身が「調査部」を確固とした存在にしていったのである。

調査部の業務

調査部が急ごしらえ的に設けられたことは、共済会当局として組織を設ける方針を事前に持っていなかったことでもある。岡田の当面の差し迫った任務としては皇太子行啓時に説明するための準備、特に資料が展示される久米通賢等の事績を短時日の間に調べることであった。説明の大役を終えると、岡田は共済会が重視する久米通賢の伝記作成に取り組むことになる。やがて調査部が共済会の組織として定着するにつれて明確な任務、調査研究の目的が提示されるようになる。調査部に何が求められたか、またどのようなことをしていたか端的に窺えるものとして共済会の折々の出版物の調査部に関する記載がある。そのいくつかについて、多少読みにくいが原文のまま引用する。

一番早いものでは、大正13年(1924)9月刊『鎌田共済会雑誌』1号に、調査部の調査研究上の「題目」として、

- 1 坂出町発達史
- 2 本県人海外発展史
- 3 本県産業史
- 4 讃岐史料の蒐集及編纂

を挙げている。

昭和3年(1928)5月の共済会10周年記念式の際に作られた「財団法人鎌田共済会十周年経過概要」(活版)の調査部項では、

「大正十一年十月設置、郷土の地理歴史研究より漸次全国に及ぼし、文化生活の進歩向上に資し、現今は讃岐一般史料に関する研究調査に進み、久米栄左衛門翁伝は先月出版せり」とある。

昭和6年(1931)5月の『財団法人鎌田共済会施設概要』(油印版)の調査部項では、

「郷土歴史地理に関する研究調査及讃岐史料の調査蒐集をなし、一般地方人をして史料に対する理解を与へ地方史料の湮滅散逸を防ぎ且つ之を利用愛好するの精神を養成せんとす、即ち県内に散在せる史料を漸次採訪研究、史料の購入とうしやをなす」とある。

昭和17年(1942)10月刊『財団法人鎌田共済会要覧 昭和十六年十月現在』では、「本会事業系統表」の調査部の箇所には次のようにある。

郷土歴史地理研究調査

郷土史料の調査蒐集

郷土史料の購入謄写模写撮影

県内外よりの讃岐史蹟史料調査の斡旋、研究者の指導援助

研究調査物の出版

時期により多少ニュアンスの違いがあるが、調査部がどのようなことをしていたかが知られるであろう。その中で一貫しているのは「史料」の採集、蒐集、謄写、模写等であり、これは史料(ここでは歴史研究の素材となる記録や古文書)を最も重視した岡田の意図が強く打ち出されたものである。

岡田唯吉と調査部

岡田唯吉は県内各地の調査に寸暇を惜しんで飛び歩き、時には県外、特に東京に度々赴いた。東京大学史料編纂所へも何度も行っており、また同所の史料編纂官が史料採訪に香川県を訪れた際には同道している。岡田の史料重視の精神はこのようなところからも培われたのであろう。

調査部では多くの借用した史料を謄写しており、それが集積されて現在貴重な史料群になっている。「謄写」とは史料を忠実に筆写することで、史料編纂所が史料を収集するために採用している方法である。同じく同所は「影写」も用いているが、これは寸部違わず写し取る方法で特別の技術が必要である。影写は無理としても謄写なら調査部でも可能として岡田が採用したのである。これが絵図などの場合は「模写」となる。

それではこれらの謄写・模写を誰が行ったか。多忙を極める岡田唯吉に出来るはずもなく、しかも調査部職員は岡田1人だけである。このため最初のうちは図書館職員が行っていた。『図書館日誌』には「調査部浄書」という記事が頻出する。

いくら岡田のたぐいまれな能力をもってしてもやがて郷土博物館が完成し、岡田がその開館準備にも関わると調査部は1人では無理になる。そこで大正13年7月に神崎喬四郎が史料写し(絵図を主とする)の囑

託として調査部に採用され、さらに同年9月に草薙勇が図書館と兼務の書記として調査部に配属された。毎年の史料展覧会や郷土博物館の展示用に借用したものはできるだけ謄写をするが、それを草薙書記が担当した。

そして大正14年5月に郷土博物館が開館するが、その担当は調査部員が兼務することになったので、岡田や草薙はさらに多忙になった。

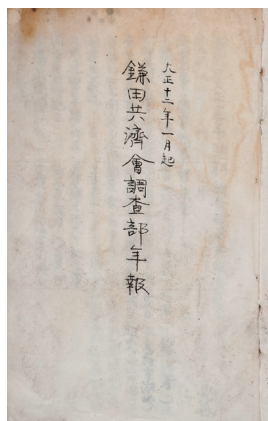
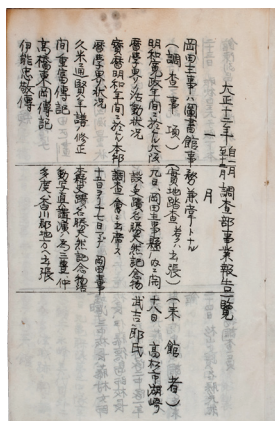
大正15年5月7日の記録では、借り入れ史料・史籍中で謄写を要するものが既に2、30種となり、到底1人の書記が図書館兼務では間に合わないので、筆耕を雇用して対処したいと訴えている。('博物館第一回陳列二関スル雑録')。

その後、昭和16年頃には調査部の体制も多少改善されていたが、それでも岡田主事以外に、主事補1名(図書館兼務)、書記1名、他に館外筆耕2名に過ぎなかった。同時期の図書館は主事1名、主事補3名(内1名調査部兼務)、書記補4名、館丁2名の10人体制であった。職務の内容が異なるので単純な比較はできないが、共済会としては図書館に注力していたことは確かである。

岡田唯吉は『鎌田共済会雑誌』に多数の論考や調査報告を発表しており、また共済会から多くの書籍を出版している。それは鎌田共済会職員の中で随一である。岡田の調査研究の詳細や業績についての紹介・考察は別の機会に譲るが、その対象とする時代や分野は多岐に亘り、驚くほどの仕事量であった。また乞われればどこにでも出かけ講演をした。しかも調査部で調査研究を行うのは相変わらず岡田唯吉1人であり、その奮闘は続いた。

やがて日本は戦時体制となり、戦況が厳しさを増すとともに共済会職員にも招集される者が出て、昭和19年頃には共済会活動も縮小していった。岡田唯吉は敗戦直後の昭和20年10月に没するまで主事の任にあり、初代主事であるとともに最後の主事であった。まさに調査部は岡田そのものとさえ言えるものであった。

(学芸・あゆみ班)



◀「鎌田共済会調査部年報」

大正12年から「調査部事業報告一覧」(総称「年報」)が作成される。記事は毎年末にまとめられるが、これにより調査部の具体的な活動状況が知られる。昭和2年からは「調査部及博物館事業報告一覧」となる。

『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』と岡田唯吉 第3回公開講座から

昭和3年(1928)に刊行された岡田唯吉^{おかだ たけきち}著『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』は、久米通賢(栄左衛門)の生涯と業績を小冊子の中に分かりやすくまとめたものとして支持され版を重ねた。初版から年月を経て内容・表現ともに修正を必要とする個所があるのは当然であるが、現在でも久米通賢に関する基本的な伝記として販売も続いている。

岡田唯吉(明治5年～昭和20年・1872～1945)は、高松市内の小学校長から大正11年(1922)に鎌田共済会調査部主事に転じ、郷土博物館開館後はその主事も兼ね、旺盛な調査研究活動を通じて鎌田共済会の歴史部門を支えた。本来考古学研究者であるが、共済会では郷土の古今の歴史の調査研究を続け、博物館の展示活動をする一方、多くの著作を生み出し、数多くの講演活動も行った。しかもほとんど独力でそれらをやり遂げた。

ここではすでに鎌田共済会の中で歴史的文献ともいべき存在になっている本書が、どのような経過を経て作成されたかを述べていきたい。また全5版が刊行されているが、それらの相違点等についても触れる。

伝記作成の発端

大正7年に鎌田共済会を設立することになる鎌田勝太郎は、坂出塩産会社の代表として、かねてから塩田開発により坂出を繁栄に導いた久米通賢に関わる資料の保存に熱意を持っており、自ら資料を集めるとともに、久米家が持ち伝えた資料も併せて保存し顕彰していくことに意を用いていた。

大正11年11月に摂政宮裕仁皇太子^{ひろひと}が、翌12年5月に久邇宮家一行が鎌田共済会を訪れた際に、平賀源内や勤皇志士の遺品とともに久米通賢資料を坂出にとってかけがいのない遺産として台覧に入れようとしたのもその思いの表れであった。

皇太子行啓の1ヶ月前に調査部主事として共済会入りした岡田唯吉の最初の任務は、皇太子に陳列資料の説明をすることであった。それが済むと間もなく久米通賢の調査研究に着手していることから、その伝記を作成することも調査部での任務として与えら

れたものであろう。共済会会頭である鎌田勝太郎は久米通賢顕彰の方法としてその事績を明らかにし伝記としてまとめることを岡田唯吉に委ねたのである。

岡田は、昭和18年刊の『久米栄左衛門略伝』の中で「20年前高松に勤務していた頃、久米栄左衛門は坂出塩田^{しお}を拵えた人、数学者だとして知っていた程度であり、その後鎌田共済会に来て研究を始めた」と、共済会勤務以前に久米通賢について特に知識があったわけではないと吐露している。

その頃の久米通賢研究の現状について岡田は、『鎌田共済会雑誌』第1号の「従来に於いて研究されたる伝記」において、「近譬要録〈三上幸太郎著〉 讃岐史要〈黒木安雄著〉 香川県史 讃岐人物伝〈福家惣衛著〉 雑誌教育画報 雑誌讃岐 其他 坂出塩産会社編 坂出町小学校編 大川中学校調 大川郡役所調(の伝記)」などを挙げ、「右の伝記は何もよく似よつたもので多くは世間に残つて居る各種の伝説を綜合し之に幾分の史料を加味して編せられたもののやうであります」とやや批判的に述べている。

一方「久米氏現戸主たる久米栄氏(栄左衛門曾孫現今坂出町住)の厚意によりまして尚ほ同氏の蔵せられた全部の参考史料を我鎌田共済会調査部に提挙されましたので幸にも栄左衛門一生の事蹟を確実にしかも詳細に研究調査することが出来るやうになったのであります」(『共済会雑誌』第1号)とある。これは大正11年12月に鎌田憲夫共済会理事長と久米栄氏との間で久米通賢資料の寄託契約がなされていることなどを言うのであろう。その結果、通賢の手記・文書・製作品・往復書簡等が数百点あり、以後『共済会雑誌』に連載する通賢年譜や伝記はこれらの史料に基づいて作成したもので、通賢の事績を確実に知ることができるとしている。すなわち岡田のいう確実な「史料」によってこれまで先人がなしえなかった通賢研究が可能になったと驚喜しているのである。

伝記作成の経過

主に『鎌田共済会調査部及博物館事業年報』により作成の経過を見ていく。大正12年には、1月に「久米通賢年譜の修正」、2月に「久米通賢測器」「久米の



数学暦学量地学を習得せし系統」「同使用測器製作系統」「伊能忠敬四国測量状況」という記載があり、間重富、伊能忠敬の伝記も調べている。

3月になると岡田は久米通賢事績並に引田地方史蹟調査のため大川郡引田町相生村に出張し、引田町城山、相生村久米旧宅・墓所、並びに遺物調査をしている。さらに3月末から4月にかけて千葉県佐原町の伊能家史料調査に出かけている。そして4月20日には「久米通賢略伝第一稿を了す」とある。

以後は7月に大川郡引田町相生村地方へ城山踏査、久米・伊藤史料蒐集調査のため出かける程度で、調査部内で「久米通賢史料」を調査している。一方、久米通賢伝の講演依頼も出てくる。

翌大正13年3月19日からの3日間、久米通賢史料蒐集のため大川郡引田町相生村に出張し、さらに4月「久米旧宅調査録」作成、5月久米通賢年譜作成と続く。6月に久米史料写の校正および久米伝を修正し、10月に久米通賢年譜を校訂し、12月にも久米通賢伝の調査を行う。

大正13年9月発刊の『鎌田共済会雑誌』第1号から岡田の「久米栄左衛門伝」の連載が始まり、年譜・史料目録・伝記本文等を掲載し、大正14年7月の第6号まで続く。

連載の伝記は一部未整理の箇所もあるが、後の完成本の要素は出ており、ほとんど同文の箇所もある。ただし伝記本文が掲載されたのは、通賢の生い立ち、学問系統、天文測量、そして伊能忠敬の四国測量までで、以後の銃砲開発、産業の振興、別子銅山、新居湊切開き、大阪淀川改修工事計画、水揚器の考案と宣伝、通賢の晩年は書かれていない。

その後、昭和2から3年にかけて雑誌連載を元にまとめに入る。昭和3年2月19日の共済会役員会において、久米通賢伝3000部を出版し全国知名の士に頒布することを決定し、同年3月24日には「久米栄左衛門伝印刷成る」とある。これが『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』初版である。奥付は4月5日発行とあるが、この日は鎌田共済会創立十周年記念祝賀会が行われた。通賢忌日の5月7日には坂出町主催の壱田一百年記念式が挙行され、岡田は久米通賢事績に関する講演を行っている。『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』凡例末尾に「坂出壱田一百年記念ノ年」とあるので、本書はこれらの行事に合わせて出版されたことになる。

4版・5回発行された『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』

『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』はその後、昭和14年と戦後の昭和39年、63年、平成25年発行分を含め合計5回刊行された(11頁表参照)。現在、本書は参考文献として挙げられることがあるが、初版もその後の諸版も同一書として記載されることが多いので、内容も同一とみなされがちである。ところが各版ごとに内容にかなり相違がある(平成25年の増補修正四版二刷は単なる増刷で、第一刷と内容は同じ)。

初版と昭和14年の再版は岡田唯吉の著書であり、再版の増補も岡田自身が行った。両版の相違は、「ですます調」から「である調」に変わったなど細かい変更は種々あるが、内容では「久米栄左衛門事蹟史料目録」19頁分が付加されていることが大きい。これは当時の共済会に保管・所蔵の通賢に関わる器物・文献資料の総目録で通賢伝記の根本史料である。また伝記本文は昭和14年という時局を反映し、「現在北方においてソ連がしきりに日満国境を脅かし、西南方面では英米仏が我が国を圧迫、このような重大時期に兵学者、科学者、経済家、土木家である通賢の事蹟を述べることは最も必要な事」などと述べ、通賢が我が国の軍備を強くするため、各種銃器の改善発明、強力な軍艦の考案、強烈な火薬の製造をしたと述べている。

戦後の3回は岡田没後の刊行であるから、その増補・修正は別人の手で行われたことになる。まず判型が菊判からB6判へと小型になり、漢字・片仮名文から漢字・平仮名文に変更され、新字体、新仮名遣いになっている。それだけでなく例えば、昭和14年版では「県下二市二十二ヶ町中坂出町ノ如ク」とあるのが、昭和39年版では「県下五市三十六ヶ町中坂出市の如ク」と昭和39年の状況を反映させている。さらに、「現今北方に於いてはソ聯とのクナシリ・エトロフ等に関する問題、南方に於いては日韓交渉問題等重大問題解決の時期に当り」とこれまた昭和39年の状況に合わせている。発行者はその時点の博物館長西山光衛であり、増補修正をしたのも西山であろう。奥付から岡田唯吉の名が消えているのは、岡田本とは別の新たな通賢伝記の発行という体裁を取ろうとしたのかもしれないが、全体的に見れば内容が大きく変わったわけではない。

昭和63年の四版では26頁の「久米栄左衛門略伝

岡田唯吉述」という全くの別本が末尾に影印で原本の体裁そのまま、すなわち旧字体・旧仮名遣いの状態で追加されている。この本は大政翼賛会香川県支部が昭和18年に刊行したもので、岡田の講演録である。しかし内容的に見て敢えて載せるほどのものとは思われず、この時期に増補した意図は不明である。しかも奇妙なことに発行者は西山光衛であるが、西山は昭和49年に物故している。昭和63年当時の館長は山地正夫であるから、この増補も山地の行ったことであろう。

久米通賢伝の今後

大正2年に鎌田邸を訪問した大隈重信が一見した後しまいこまれ、平成14年9月に鎌田醤油本店倉庫2階から発見され、一躍脚光を浴びた久米通賢資料

51件66点を岡田唯吉は当然ながら見ていない。これらを含め関係資料の一層の精査が必要である。

また、岡田の通賢伝は、書名に「讃岐偉人」と冠するように、偉人伝として顕彰的な性格を持つが、そのことから来る通賢の超人化の傾向も見られる。「偉人」観からの脱皮が求められよう。

多岐に亘る活動を行った久米通賢について、研究を深めるため諸分野の専門家の共同研究は必然である。その成果が現れたものが『もっと知りたい!久米通賢』(2010年12月1日刊 久米通賢研究会編、鎌田共済会発行)で、新たな通賢伝の方向を示すものである。一方、岡田のように独力で通賢伝を編むことは今後かなり難事になっていくのかもしれない。

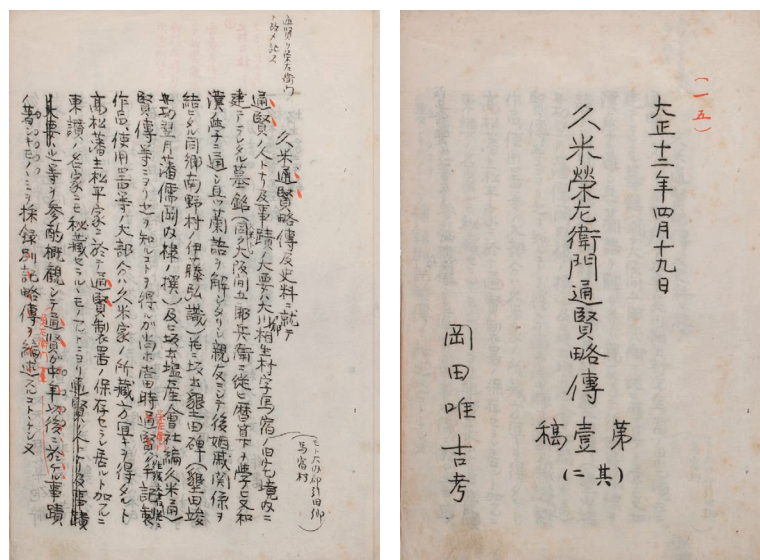
(加藤 優)

『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』 諸版					
	初版	増補修正再版	増補修正三版	増補修正四版一刷	増補修正四版二刷
発行日	1928年/昭和3.4.5	1939年/昭和14.11.1	1964年/昭和39.6.28	1988年/昭和63.9.27	2013年/平成25.8.31
奥付人名	著者兼発行者 岡田唯吉	著者兼発行者 岡田唯吉	発行者 西山光衛	発行者 西山光衛	※備考参照
判型/本文頁数	菊判/49	菊判/66	B6判/56	B6判/56+26	B6判/56+26
※備考	昭和3年・昭和14年の下に「著者 岡田唯吉」を復活。昭和39年の下に「編者 西山光衛」を復活。昭和63年の下に「編者 山地正夫」を記入。平成25年の個所は、編集なしで増刷しただけなので無記名。				

(付記)『讃岐偉人 久米栄左衛門翁』初版と再版は国立国会図書館近代デジタルライブラリーに収録されており、同館HPからの閲覧・プリントアウト可能である。



▲「讃岐偉人 久米栄左衛門翁」
昭和3年、昭和14年、昭和39年の各版



◀「久米栄左衛門通賢略傳」(伝記草稿のうち)

御内御用側量方絵図帳 (表紙解説)

— 測量隊のフィールド・ノート —

久米通賢が62年の生涯において成し遂げた様々な仕事の内、天文・測量に関する業績を上げたのは20代から30歳半ばが中心であり、その一つに御用測量がある。

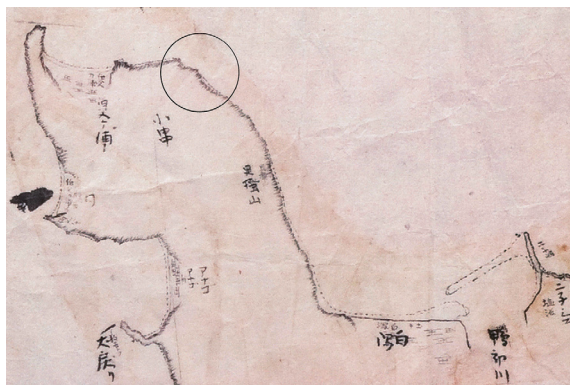
文化3年(1806)通賢27歳の時に高松藩領内の御用測量を命じられ、同年11月14日に阿波との国境に近い通念島(弁天島)からはじめて海岸沿いを西に測量を進め、土器川から南下、往還筋^{おうかんすじ}を東にもどり12月20日に1か月余りかかった測量を終了した。翌年には島嶼部の測量と一部の地域の再測量を行っている。

久米通賢の測量関係資料は内容を見ると、測量現場で使った野帳類、そのデータを書きなおしたもの、地図の下書き等にわけられるが、「御内御用側量方絵図帳」は測量時に作成された野帳で、表題は統一されていないものの測量地域別に6冊残っており、他に断簡がある。

当号の表紙は「御内御用側量方絵図帳 寒川郡鴨部下庄」の一部である。これは鴨部下庄村(現さぬき市鴨庄)の海岸部の測量をしながら作成されたもので、図をみると、測量した地形の特徴を描いた略図の中に基準となる点や測点の方向、角度、距離あるいは地名、他の丁では塩田や田畑、集落、社寺や構造物など知りえたことが整理されずに書き留められている。後で測量図を作成するにあたって地形を描く参考にし、また地名などを記入する際、もともとなった資料である。描かれている地点は前後の丁から判断すると、出来上った「御内御用測量下図(東)」(部分)の円の部分であり、貝掻山(小串山)の北斜面海岸であろう。

完成した地図には絵図帳にある多くの情報を整理選択して記入しているため、今は失われた地名、土地利用の変遷など様々な土地の記憶は遺された絵図帳を詳細に見ていくことでたどることもできるだろう。

(廣瀬 永津子)



▲「御内御用測量下図(東)」(部分)

INFORMATION

■ 鎌田共済会郷土博物館第4回公開講座

「江戸時代の天文学と 久米通賢の科学的業績」

平成26年 **10月25日(土)** 13:30~15:00
(開場13:00)

会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師：中村 士(なかむら つこう) (放送大学客員教授)

〔参加無料、締切10月18日、先着40名〕

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話：0877-46-2275

FAX：0877-45-0035

H P: <http://www.kamahaku.jp/>

■ 次回予告(予定) 第5回公開講座

平成27年4月25日(土)

鎌田共済会の出版活動について(仮題)

講師：加藤 優(館長)

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分 (入館は4時まで)

休 館 日：月曜日／祝祭日

夏季特別 (8月13日～15日)

年末年始 (12月29日～1月4日)

入 館 料：無料

(表紙説明)

● 御内御用側量方絵図帳

表紙左側2段目は第5丁表、3段目は第4丁裏

● 久米通賢の署名と花押

「文政10年・坂出浦御新開釜家鋪地割之□」裏面に記載